



第6ゾーン

晴れた日には富士山が雄大な姿を見せる。川辺のパーゴラには、川沿いの住民が種えたブドウが実を付け、その下で付近の女子社員たちがお弁当をひろげる姿も見られる。また、休日には親子連れが採りや魚釣りにやってくる。

■人と水辺の生き物の共存の場 (第8ゾーン)  
古い資料によると、この付近はかつては4本の細流が東に向かって流れ、水甲花として有名なミンママバイカモがこのあたりにも繁茂していたらしい。昭和28年、水温を上げて稲の生育を促進するために温水溜池として築造され、護岸も石積みで固められた。

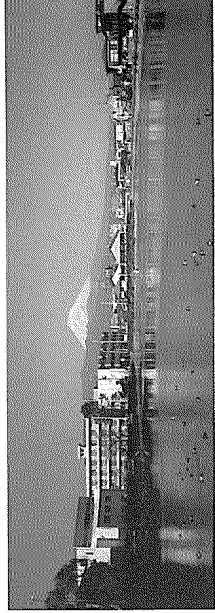
近ごろは池のすぐ隣まで住宅が建て込み、飲食店も出現し、雑然とした風景となっていた。冬の附れた日の水面に映る「逆さ富士」に愛着を感じている住民も多く、休日には釣り場として人々に親しまれてきた場所でもあるが、流入した有機物が分解されずに池底にへドロロ化して

堆積し、生物の棲息環境としては劣悪な状態にあった。ここでは、池の中に中州を造って水際の長さを増やし、浅瀬によって水温を上昇させ、水生植物による水質浄化を図ることで、かつてのような多様な生き物の棲息環境を創ることを目的としている。また、生き物の聖域として保全する場と、市民が日常的に利用する場を区分することで、人と生き物の共存の場を目指している。

池の南側では、既に市民グループによるボタルの里づくりが進められており、県による整備事業との一体化が図られている。工事は来年3月の予定であるが、水際には既に植物も繁り始め、中州のまわりにはオイカワの産卵場となり、トンボも池の上を飛び回っている。池に張り出したテラスやベンチも、周囲の人々に利用され始めている。

■自然環境の追跡調査

計画に先立って、鳥類、淡水魚類、昆虫、高等植物などの自然環境調査が行わ



第8ゾーン

れている。また工事完了後も区域ごとに継続的な追跡調査が行われ、その結果が下流の計画に反映されている。

特に第8ゾーンにおいては、生物相が安定するまでの間の長期的な調査が必要とされているが、子供連連れに対する環境教育の重要性も高まっていることから、今後の調査には、周辺の小・中学校などの積極的な参加が望まれる。

水辺の環境づくりと住民参加

ここ数年の間に、自然を生かした水辺づくりが全国各地で盛んになり、今までのコンクリート護岸が自然の手に戻され始めている。しかし、その結果として生じる川掃除や草刈りなどの維持管理費の増加が行政の重荷になりつつあることも事実である。

かつては周辺の住民によって行われていた水辺環境の維持管理を、行政に押しつけてしまったことも、川から人を遠ざけてしまった原因の一つであろう。自然に接するのと同様に、頼むしい管理も楽しみの一として享受できる心のゆとりを持つことも大切である。

都市部における自然環境の復元も活発に行われているが、それらをどう維持管理していくかという総合的な視点を欠いた表層だけの自然の模倣は、結果的に住民の十分な理解を得ることはないであろう。

最上流部 (第2ゾーン) の整備をきっかけに「三島ゆうすい会」を始めとして「グラウンドワーク三島実行委員会」、「源兵衛川を愛する会」などの市民団体が誕生し水辺の環境づくりへの積極的な参加が行われている。川辺に設けたテラスや階段も、川掃除や夕涼みなどに利用され、植木鉢を並べて楽しむ家も見られるなど、ほほえましい風景をつくくりだしている。

しかし、金魚を放流したり水際に外来の植物を植えるなど、本来その川にないままに自生する在来種の種が駆逐される危険性も孕んでいる。

現在、川掃除や水際に関する勉強会、シンポジウムなども行われているが、川に関する総合的な知識を共有し、本来の管理主体である住民自らの手によって維持できる水辺の環境づくりを目指す必要がある。

最下流 (第8ゾーン) は、心身障害者



第8ゾーン (撮影・北田愛治)

福祉施設や小・中学校が隣接し、広域の市民に利用されているせいか住民の関心が最も高い場所である。着工前に子供たちを集めて魚の引越し作業が行われたり、前述の市民団体や地元町内会からも、完成後の維持管理に対する積極的な協力が望めそうである。

川とともに暮らす知恵

最近では、川沿いの住宅の建て替え等周辺環境も変わらなつつある。川への生活排水の流入が減り、間もなく「川のみち」も当初の浄化水路としての役割を終えようとしている。

竣工直後から、川遊びをすすめるおおぜいの子供連連れにぎわい、大人も一緒に遊んでサワガニや魚とりが夢中になっている。かつての川と人の関わりが復活しつつあるようだが、これも遊べる川が戻ってきた結果として喜ばしいことであるが、生態系への大きなダメージにつながっている。一度定着してしまった川とのつきあき方を思い出すには、しばらくの時間を要するだろう。生き物の棲息環境と市民の思い

の場のパラドクスをどう俵つかが今後の重要な課題である。

川と暮らしが密接につながっていた頃は、川から水を汲み、野菜や茶碗を洗い、川で洗濯をしていた。水質が豊富であった頃は、流入した有機物は希釈され、ジエスタマやヨシなどが吸着し、人々はそれらを刈り取って薪として利用していた。

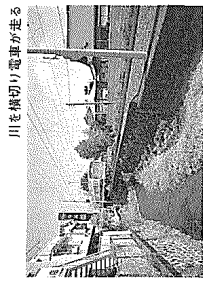
生活の変化にもなっって、そういった共存の知恵も徐々に忘れられ、環境維持の循環システムが失われていった。川に設けられた緑な仕掛けによって、人々が川に日常的に接することができ、自分たちの手で川を守り支えてゆくという新たな思想も生まれるのではないだろうか。

この計画が、川と共に暮らすための新たな知恵を生み出すきっかけになればと思う。「かわ」から「みち」へ、「みち」から「まち」へ  
県による整備事業は今年度で完了するが、湧水量の減少など流域には改善すべき課題も多く残されている。

今後は、市民の手で引き継いでもらえるものと思う。

源兵衛川の整備をきっかけに芽を出した住民参加のまちづくりが、悪しきアマチュアリズムに陥ることなく、地域全体に広がっていくことを期待したい。

「かわ」が川沿いの家々の前提となつて「みち」につながり、人々の意識が「みち」から「まち」へ広がる。新しいものは、古いものの良さを受け継ぎ、周囲に受け渡す。あいまいにつなげてゆく。三島にはそんなまちづくりがふさわしい。



川を横切り電車が行く 特撮・河川の景観デザイン 75